

市民不在の事務事業評価に批判の声続出 自治基本条例に基づき市民参加重視してこそ「市民がど真ん中」



市は昨年実施した事務事業の総ざらい評価結果に基づき行政運営を進めようと、地域協議会などに出向いて説明を行っている。しかし、いくつもの地域協議会で厳しい批判の声にさらされています。

14日夜に行われた吉川区地域協議会（写真）では、改良整備をやめるとの評価を下した市道路線について、「安全、安心が言われているのに、道路の幅員を広げないと危ない。除雪の効率も悪いし、過疎に拍車がかかる」との批判が出ました。また、総ざらい全体に対しては、「27年以降、あなた方はどういう市政運営をするつもりなのか。（地域事業費制度の見直しをこのまま進めると）ますます不公平になる。何のための市町村合併だったのか。10年くらい先を見越せなかったのか。あなた方は専門職ですよ、情けない。もう少し市民に心温かいことを考えてほしい。公平の立場で立案してほしい」と委員が激しく迫及する場面もありました。こうした声は吉川区地域協議会だけでなく、各地で出ています。



上越市の自治基本条例第25条では、「行政評価について、市民が参加することができる評価の手法及び第三者による評価の手法をとり入れるよう努めなければならない」としています。が、今回の事務事業の総ざらいは行政側だけで行っています。しかも単なる参考資料ではなく、それを行政運営の基本に据えようとしています。そこが大きな間違いだったと思います。行政評価のやり方は早期に修正してほしいものです。

中山間地対策強化へ条例素案

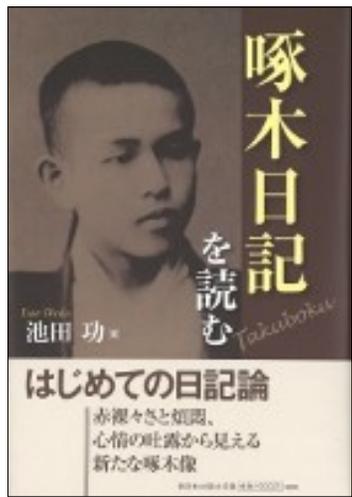
市議会中山間地対策特別委員会はこのほど作成した「上越市中山間地域振興基本条例」素案について、16日から18日までの3日間に8会場で市民のみなさんの意見を聴く会を開催しました。

このうち、大島区会場では、約40人の方々が参加してくださいました。説明後の意見交換では、「条例制定後、どうなるのか聴かせてほしい。条例が出来たこ

とによって、どれだけ目を向けてもらえるのか」「一般的に条例の制定は行政がやるのが通例。議会が取り組むことを評価する。農地は高齢化が進み、守り切れない。平場のみなさんから山間地を理解してもらわないといけない。この点、要望する」「公益的機能とは何ぞやというところを深めてほしい。中山間地だけ助けてくださいではだめ。自分たちが何かをしなればならないという点が弱いのではないか」などの質問、意見、要望が出ました。

安塚区会場（写真）には、約30人が参加。こどももたくさん意見や質問が出ました。「条例制定は良いが、すでに遅きに失している。現実に農業者がいなくなつて、兼業でないやっていけない。そこを考えていただきたい」「安塚も雪が多い。雪対策についてあまり触れられていないのではないか。雪との共生を盛り込んでほしい」「漠然としている。きれいに思える。中山間地では商人もいれば、工業の人もある。これらの人たちが農業の人たちと一緒になつていかなければ発展していかない。連携が必要だ。農業だけではなく。中山間地全体を考えて条例を考えてほしい」などです。

池田功 吉川区吉井出身の池田功が書かれた本です。多くの日記を中心に論じた初めての評論。時代や国境を越えて感動を与える啄木の新たな魅力がさぐります。新日本出版社刊、1995円。ご希望の方は橋爪までご連絡ください。



うなるのか聴かせてほしい。条例が出来たこ

雪がうっすらと降った日の朝、野に生きる動物たちの足跡を見つけ、楽しい思いをしました。いうまでもなく、足跡は動物たちの足の大きさ、形、その時の急ぎ具合などによってそれぞれ違います。そして、同じ動物でも、歩いている時の様子が微妙に違って見えるからおもしろい。

最初に見つけたのはタヌキの足跡でした。足跡はふたつ、二匹のタヌキが五メートルほどの道路を横断したときのものでした。車から降りて、道路の端っこを見ると、この二匹のタヌキが休んでいたとみられる雪の「がらんぽつ」（空洞）がありました。そこで一晩過ごし、まだ月が明るいうちに出たようです。このタヌキたちの足跡はゆったりとしていました。のんびりしたタヌキ夫婦の散歩かも知れません。

次に見つけたのはウサギです。県道から働き者の高齢者夫婦が住んでいる家に至る細い道、そこには新聞配達員さんの長靴の跡と一羽のウサギの足跡がきれいに残っていました。大きくて横に並んでいるのは後足、その後小さく縦に並んでいるのが前足の跡です。このウサギの足跡は子ども頃から見ているからでしょうか、親近感を覚えます。こんな言い方をすると笑われるかも知れませんが、子ども時代に見たウサギたちがいまも生きているように思えてなりません。

さらに進んでいくと、今度はキジの足跡に出会いました。まあ、しっかりと跡をつけたもんです。足の指、一本いっぽんの形がはっきりとわかります。面白かったのは、ここでも新聞配達員さんの足跡と一緒に残っていて、この人の足の運び具合がウサギの足跡が残っていた場所とまったく同じだったことです。ちよつとがに股で、かかとを引きずるところがある足跡。同じ配達員さんですから、足跡が同じなのは当たり前ですが、キジの足跡も気のせいでしょうか、ちよつぱりにがに股でした。キジが配達員さんの足跡を見てまねをした、と思うのは考え過ぎかな。

この日の朝、最後に見た動物の足跡はリスです。後ろ足の跡が前に横並びでついてるのはウサギと同じですが、前足の跡は縦並びとならず、小さく横並びになっていました。リスが餌を探すのは主に夜明けの頃といえます。リスは、秋にクルミなどの木の実を地中に埋めておいて、冬になって雪の下から掘り出して食べることもあるとのことですから、この日も餌を掘り出かけたのかも知れません。それにしても、足跡の間隔が長かった。何でまたこんなに急いだのでしょうか。

動物たちの足跡を見ていると、いろんなことが次々と浮かんできます。

中学生時代、私はスキーを履いてウサギの足跡を追いかけたことがあります。近くの中学生の仲間たちと一緒にしました。当時はたくさんウサギがいました。雪の上にはそれこそたくさんウサギの足跡がありました。それらの中から、最も新しい足跡を見つけ出し、その跡を追うのです。弓矢を作り、それらを持って追いかけたのですが、ワナと違って簡単に捕まえることはできませんでした。でも、足跡を追って数時間後にウサギの姿を見つけた時の気持ちはいまでも忘れることができません。ドキドキしましたね。

野に生きる動物たちの足跡は雪があるからしっかりと確認できます。年をとったので、スキーを履いて動物たちの足跡を追う元気はなくなりませんでした。でも、観察するだけでも結構楽しい。足跡を見つけたら、ゆっくりと観察してみませんか。動物たちの世界も人間と同じで、恋をしたり、ケンカをしたりとドラマがいっぱいです。

いとう誠本部長の豪雪地調査、赤旗で報道



日本共産党上越地区豪雪対策本部のいとう誠本部長は12日午前、大島区の旭地区を訪れ、雪と闘う人たちを励ましました。いとう本部長が豪雪視察で大島区を訪れるのは2度目です。今回は雪下ろし作業やブルドーザーやバックホーを使った排雪作業を「しんぶん赤旗」記者とともに視察しました。

写真は照源寺の除雪現場で竹平町内会長の内山文英

さんから雪対策などについて話を聴くいとう本部長と私です。要援護世帯の除雪状況や共同施設の除雪など

について詳しく聴くことが出来ました。いとう本部長はとても積極的で、自らも屋根に上って、雪下ろしをしている人たちの声を聴いていました。

「しんぶん赤旗」記者は大島区での取材が終わってから、吉川区上川谷へと移動しました。上川谷では、Tさんのお家で冬期保安要員の仕事や高齢者独り世帯の除雪援助などを取材させていただきました。Tさんは、通院や買い物、急病にかかったときのことなどを語ってくださいました。Tさん宅では昨年家族が「ひとり」増えました。猫です。生まれてからまだ1年経たないというこの猫は人なつっこく、人間にじゃれたり、付いて回ったりととても賑やかでした。

この日のことは20日付の「しんぶん赤旗」日曜版に、「豪雪集落の力で除雪」という見出しで大きく報道されました。ごらんになりたい方は橋爪までお知らせください。

